第四回　「大英帝国の遺産」

岡部　芳彦

この間、ブリストルの奴隷貿易や 18 世紀の女性史がご専門で、西イングランド大学（ＵＷＥ）のマッジ・ドレッサー准教授のお宅にお招きを受けました。そこにはワイン農場を休業して今ブリストルで研究調査中の 50 代のアメリカ人大学院生や博士号をとったばかりのブリストル大学のスタッフらも招かれており、どうやらマッジ先生の計らいで若手研究者の意見交換の場を設けてくださったようです。

写真奥の暖炉は 18 世紀中頃にインドで作られたそうです。

ブリストルにはブリストル大学のほかにＵＷＥがあり、学生数約 3 万人､4 つのキャンパスを持つイギリスでも人気の大学の一つです。マッジ先生は、松岡正剛さんの『千夜千冊』の中でも紹介されている気鋭のアメリカ人研究者で、外国人としてイギリスを研究対象にしているので、同じ境遇の僕にも非常に親切で、多くの助言をしてくれます。手作りの美味しいラザニアを食べたあと、アンティークの暖炉を囲んで話をしていると、いまブリストルのマナー・ハウスについての本を書いているとおしゃっていました。

マナー・ハウスは、カントリー・ハウスとも呼ばれ、もともとは荘園（マナー）を所有する貴族やジェントリなどによって建設された大きな邸宅のことです。その後、18 世紀に入り、ビジネスで成功した企業家たちによっても建てられるようになりました。ブリストルがロンドンに次ぐイギリス第 2 の貿易港として発展する中で、財を成した貿易商らによって広大な土地の中に建てられたマナー・ハウスですが、その後の経済環境の変化によって個人で維持するのが難しくなり、現在そのいくつかはブリストル市によって公園として管理され、市民の憩いの場になっています。ブリストルの歴史を語る上で非常に重要だというマッジ先生のお言葉もあり、また週末の娘の散歩にもいいかと思い、行ってみることにしました。

まずブレイズ・カッスル・エステイト（Blaise Castle Estate）へ。1796 年から 1798 年にかけてブリストルの商人で銀行家でもあったジョン・ハーフォード(John Harford)によって建てられました。ハーフォードは、2006 年公開の『アメイジング・グレイス』という映画にもなり奴隷制度廃止運動で有名なウィリアム・ウィルバーフォースの友人で、画家としても有名だったそうです。現在ブレイズ・カッスル・エステイトは 18-19 世紀の生活道具と衣装の博物館として無料公開されています。

ブレイズ・カッスル・エステイト

つづいてはキングス・ウェストン・ハウス(Kings Weston House)です。ブリストルの外港であるシャーハンプトンの丘の上にそびえ立ち、周辺の町を一望できます。お屋敷の巨大さは、前に立つ娘と比較していただければお分かりいただけるかと思います。18 世紀を通じて建設や改築が繰り替し、第一次世界大戦中は病院にも使用され、また所有者が何度も変わった、いわくつきのマナー・ハウスです。

キングス・ウェストン・ハウス

最後はアシュトン・コート(Ashton Court)。今回紹介する中では一番古くその地所自体はサクソン人の時代や 11 世紀のノルマンディー公ウィリアムのイングランド征服時にはすでに存在したそうです。15 世紀に商人であったジョン・スマイス(John Smyth)に購入されてからはスマイス家のお屋敷で、17 世紀から 19 世紀にかけて増築され現在の横に広がる邸宅となりました。第一次大戦中は軍病院に、第二次世界大戦中は「バトル・オブ・ブリテン」においてドイツ空軍を迎え撃つイギリス空軍やノルマンディー上陸の準備をするアメリカ軍の司令部としても使用されました。戦後しばらくはスマイス家の所有でしたが 1959 年にブリストル市に移管され、現在は鹿の放牧と乗馬で有名な公園で、毎年夏にはブリストル国際気球フェスティバルが開催されています。

イギリス最盛期に蓄えられた財力をつぎ込んで建設された貴族や企業家たちのお屋敷や庭園が子供のいい遊び場になるとは、まさに大英帝国の遺産を享受しているなあと感じます。娘には、アシュトン・コートの歴史的な建物を利用したカフェで、地元のオーガニック食材で出来たアイスクリームを食べるのが一番のようです。

アシュトン・コート